

# 菅田庵と手水鉢

庭園文化研究分科会 宇野 真一

## 1. 有澤山荘・菅田菴（本文では庵と表記）

菅田庵を含む有澤山荘は松江藩家老有澤弑善（宗意）によって寛政4年（1792年）頃開設されている。広大な敷地の一部、約3,400㎡が国指定（昭和3年）の史跡及び名勝に、菅田庵・向月亭・御風呂屋が国指定（昭和16年）の重要文化財となっている。菅田庵は松平不昧の指図（設計）によると言われる。庭園の細部についてどの程度関わっていたのかは不明だが、重要文化財指定時の説明には「～松江藩主松平治郷（不昧）ノ好ニヨリ其ノ山荘ノ臺地ニ営ミシモノニシテ～」とあり、不昧が寛政元年5月から寛政2年3月まで松江に滞在していたことから設計に関与していた可能性は高い。

不昧は鷹狩りなどの折に山荘を訪れていたようである。御成門から御成道を進んで御風呂屋へと至る。そこで心身ともにリフレッシュしてから菅田庵へ、最後に向月亭から城下を一望するという流れである。長らく非公開だった菅田庵だが2020年秋から再度一般公開されている。一般公開の見学コースは御成門の横から受付へと進み、向月亭～菅田庵～御風呂屋という逆順で回ることにしている。今回の視察では現当主有澤一男氏にご案内いただき、不昧と同じルートを辿ることができた。

出雲流庭園のデザインルーツと考えられている菅田庵である。2019年のレポートでは菅田庵の延段から巨大な短冊石までの変化を追いかけたが、今回は手水鉢に着目してみたい。



図-1 有澤山荘 配置図

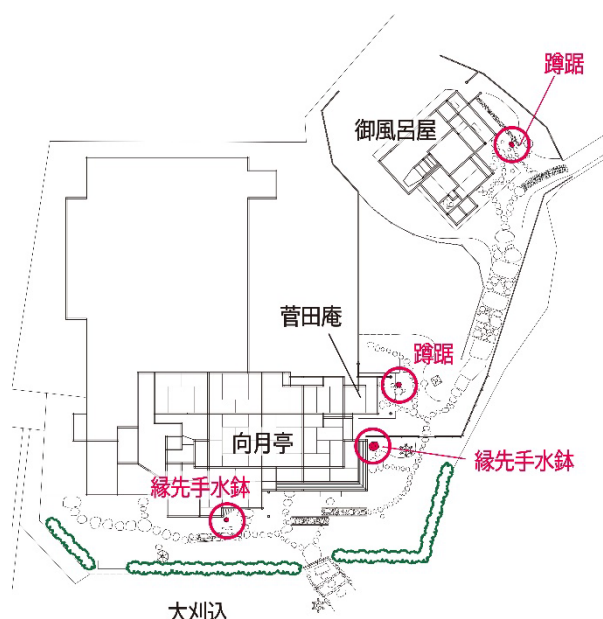


図-2 手水鉢の配置

## 2. 手水鉢について

手水鉢は本来、神仏と対面する前に口を漱ぎ身を清めるための水を入れる器である。この手水鉢が庭園に取り入れられたのは禅の精神を重視した茶の湯の発展（露地庭）によると考えられ、それ以前に造られた庭には（本来は）なかったものである。

手水鉢は大きく3種類に分けられる。

- 蹲踞（つくばい）手水鉢・・・文字通り低くつくばって使う手水鉢
  - 立（たて）手水鉢・・・立ったまま使う手水鉢
  - 縁先（えんさき）手水鉢・・・建物の縁先に置かれ、縁から使う手水鉢
- 縁先手水鉢は鉢前（はちまえ）と呼ぶこともある。

数多くのデザインが存在するが、大きく分類すると下記のとおり。

### ① 自然石手水鉢

自然石をそのまま用いたもの、自然石に水穴を掘ったもの、自然石の頂部を水平にしてそこに水穴を掘ったものがある。

### ② 加工石（創作形）手水鉢

手水鉢として新たにデザインされたもの。四角柱や球体などさまざまな形状がある。

### ③ 見立物手水鉢

灯籠や多層塔の一部など石造品を流用し、そこに水穴をほったもの。

有澤山荘には菅田庵と御風呂屋に蹲踞手水鉢が、向月亭に2基の縁先手水鉢が置かれている。

#### A. 菅田庵 蹲踞手水鉢（写真①-1）

加工石手水鉢で司馬温公型となる。しかし一般的な司馬温公型とはかなり様相が異なり、あえて分類すればという但し書きがつく。

シンプルなデザインだがあまり見かけない。出雲では石橋家（平田/写真①-1）とU氏邸（大社/写真①-2）にあるが、石橋家の蹲踞では台石の上に置かれ、U氏邸のものは縁先手水鉢で鉢前石の上に置かれている。

#### B. 御風呂屋 蹲踞（写真②）

自然石の頂部に水穴をあけた富士型に分類される。手水鉢の頂部が地表から10cm程度で非常に低く据えられていて、これも一般的な富士型（20～30cm）とは様相が異なる。

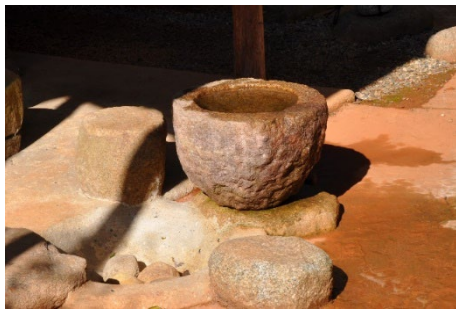
出雲では手銭家（大社/写真②-1）の茶室、山本家（出雲/写真②-2）によく似た形状のものがある。特に手銭家の手水鉢は石の色味もそっくりである。

C. 向月亭 縁先手水鉢（写真③）

自然石の頂部を水平に加工して水穴を掘ったもので、形状はスタンダード。出雲では糸原家（奥出雲/写真③-1）、鱒淵寺本坊（平田/写真③-2）などが同じデザイン系統の縁先手水鉢である。

D. 向月亭 縁先手水鉢（写真④）

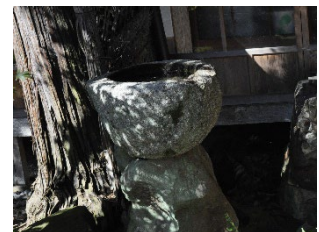
人工的に加工された円筒型の手水鉢だが、この手水鉢は橋脚を転用したもので見立手水鉢に分類される。出雲では一畑薬師書院（写真④-1）のものが同じ橋杭型、通常の円筒型（加工型）は原鹿豪農屋敷（斐川/④-2）などにある。



写真① 菅田庵（蹲踞）



① -1



①-2



写真② 御風呂屋（蹲踞）



② -1



②-2



写真③ 向月亭



③-1



③-2



写真④ 向月亭



④-1



④-2

### 3. 島根県内の手水鉢

県内数十カ所の庭園を拝見させていただき、興味の赴くままにカメラのシャッターを切ってきた。残されている写真データの手水鉢を数えあげ、島根・出雲の手水鉢について傾向を探ってみた。ただし、調査資料と呼べる精度は無いことを最初にお断りしておく。

分類としては、縁先手水鉢、茶室用の蹲踞、景物としての蹲踞・手水鉢、天水の4つである。

軒先手水鉢は24点確認できた。自然石9点、加工石10点、鉢前石の上に鉢を置くタイプ5点である。加工石10点のうち2点は先述した橋桁タイプで厳密に言えば見立物となる。種類やエリアに特筆すべき傾向は見当たらない。

茶室用の蹲踞は9点が確認でき、自然石4点、加工石3点、見立物2点（宝篋印塔1点/石見、四方仏1点/斐川）である。

景物としての蹲踞・手水鉢は34点あり、自然石23点、加工石6点、見立物5点である。自然石タイプの大半が富士型であり、一般に多いとされる舟型はひとつも見当たらない。

天水は17点、一畑薬師にある陶鉢を除き残りはすべて自然石である。今では貴重とされる自然にできた窪みを水穴としたタイプも数多く存在する。

説明が前後したが天水とは出雲独特の呼称で、出雲流庭園には必ずといってよいほど置かれている。通常の蹲踞・手水鉢と異なるのは、ひとつは常識を逸脱する巨大さ、次に置かれている位置が同じこと（庭の正面～やや東側）で、実際に手を洗うことが不可能なものも多い。

初めて天水を実見した2012年のレポートでは、月を浮かべるための水盤＝池の代りではないかと述べたが、その後、この推測を覆すほどの新たな事実は

発見できていない。水盤＝池と言っても隠喩としての存在であり、実際に皆が月を愛でたとまでは考えていないが。

もうひとつ、天水という呼称からの類推だが防火用水（としての呪物）という可能性もありそうに思っている。出雲流庭園はマジカルガーデンという側面があり、庭木・石灯籠・白石などに様々な意味や想いが与えられている。天水にも水の象徴という役割があってもおかしくはないし、置かれている位置が決まっているのもその方位が重要ではないかと考えている。



天水（出雲文化伝承館）

#### 4. 茶室の蹲踞について（補足）

出雲地方では茶室用の蹲踞が躡り口の近くに置かれる。露地の構成にもよるが一般には建物から2～3m離れていることが多く、軒先、あるいは軒下にあるのは珍しいケースとなる。事実、出雲流とは無縁の小河邸（益田）の蹲踞は書院・茶室から2m以上離れている。全国的にはこの距離感がスタンダード。

蹲踞を軒下に置いた例としては、明々庵（松江）、手銭家茶室（大社）などがあり、軒先だと菅田庵や御風呂屋、康国寺・博淵亭（斐川）、高見家（斐川）などいくらかでも実例が挙げられる。雨や雪の多い山陰の気候に配慮してこのことであろうか？



康国寺・博淵亭（軒先）

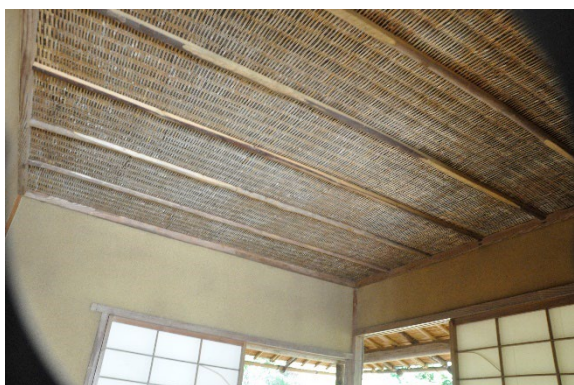


明々庵（軒下）

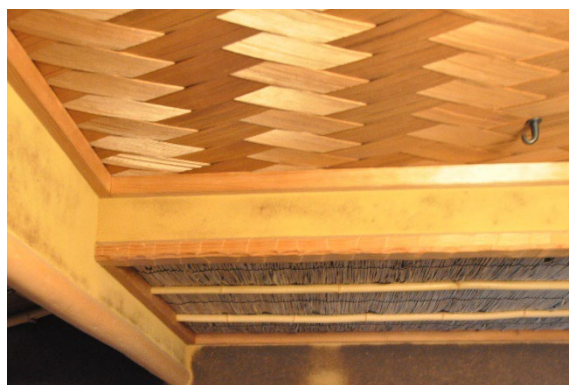
## 5. 最後に

今回の視察では通常の見学コースでは立入ることができない場所も数多くみることができた。もう一つの六地藏、御風呂屋の裏側、そして向月亭の座敷にも上がらせて頂いている。特に驚いたのが御風呂屋の天井で、通常の間代天井とはかなり様相が異なっている。御当主の説明では桜の樹皮が織り込まれているとのこと。全くの初見で、いままで聞いたことのない造作である。

庭園とは直接関係のない話だが、是非、紹介しておきたい。



御風呂屋の天井



間代天井